

---

# 戦場の蜚

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦場の蜚

### 【Nコード】

N0444E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

第二次世界大戦東部戦線。夜間出撃でレニングラードの大空で死闘を繰り広げるパイロット達。彼等の行く先は。独ソ戦初期のお話です。

## 第一章

### 戦場の蜚

その戦争はあまりにも激しかった。お互いに何百万もの兵を繰り出し合い何もかも破壊し合う戦争であった。そこには何の仁義もルールもなかった。

東部戦線。ナチスとソ連の戦いはただ破壊と殺戮があり何もかも残さない。それは陸だけでなく空でも同じであった。

今ロシアの凍て付いた空に数機の戦闘機が飛んでいる。そのスマートなシルエットからドイツ軍の戦闘機であることがわかる。メッサーシュミット一〇九である。

今空に飛んでいるのは彼等だけだ。その彼等が通信で話をしていった。

「おいヴォルフ」

先頭の一機が上を飛ぶ同僚に声をかけてきた。

「何だ？」

「イワンの奴等の姿は見えるか？」

「いや」

ヴォルフと呼ばれた同僚は主に上を見てから彼に答えた。上にあるのは青い空だけである。

「何も見えないな」

「そうか。こつちもだ」

先頭の男は下を見ていた。そこにあるのは暗く重い雲だけである。

「何も見えないな」

「流石に雲の上にはイワンもいないか」

「いや、それはわからないな」

後ろの一機が二人に言ってきた。

「カール」

「イワンの奴等は無鉄砲だからな」

カールと呼ばれた男は笑って二人に言うのであった。

「何時下から来るかわからねえぜ」

「まさか。リーダーもろくにないのかよ」

「自殺行為だぜ」

「自殺行為がイワンのお家芸だろうが」

実際にソ連軍において兵士の命は最も軽いものであった。戦車の盾にしたり地雷原をそのまま歩かせたりといったやり方がそれを何よりも雄弁に物語っている。

「何を今更言っただよ」

「何時来るかわからないか」

「昼も夜もな」

それがここでの戦いでもあるのだ。

「あいつ等は休ませてはもらえないみたいだからな」

「まあそれは俺達も同じだな」

最後尾の一機が話に加わるのであった。

「最近。総統も人使いが荒いぜ」

「それは御前の名前のせいだろ」

先頭の男が笑って彼に言ってきた。

「名前がかよ」

「御前の名前がヨゼフだからな」

言うまでもなくナチスの宣伝省ゲッペルスのことである。ヒトラーの懐刀として辣腕を振るい続けていることであまりにも有名な男である。

「そのせいさ」

「俺は士官学校出身で博士じゃないんだがな」

ヨゼフと呼ばれた彼はそう言葉を返して笑うのだった。ゲッペルスは博士号を持っていることを誇りにしており常に自分を博士と呼ばせていたのである。

「そっちになるのかよ」

「そうだよ。まあ俺もな」

先頭の男はここで自嘲めいた笑いになるのであった。

「それを言えば人のことは言えないか」

「そうだな、リヒャルト」

それが先頭の彼の名前であつた。カールが呼んだ。

「あの総統閣下の大のお気に入り作曲家の名前だからな」

「そうだな」

リヒャルト・ワーグナーのことである。ドイツの楽聖とまで言われているがヒトラーは彼の音楽を十一歳の時にはじめて聴いてから終生愛し続けていたのである。

「それを言えばな」

「御前の親父さんはあれか？音楽家にしたくてその名前にしたのかい？」

ヴォルフが彼に問うてきた。

「やっぱりそれで」

「さあな。そこまでは知らないさ」

リヒャルトはコクピットの中で首を捻ってヴォルフのその問いに答える。彼もそれはよく知らないのだ。

「実際のところはな」

「そうなのか」

「まあ。名前なんて今はどうでもいいさ」

リヒャルトは前に見て真剣な顔で言ってみせた。

「とにかく。今は生き残らないといけないからな」

「そうだな」

「全くだ」

他の三人も彼のその言葉に頷いた。やはり真剣な顔になっていてそれまでの和気藹々としたいささか戦場には似合わないものは消えてしまっていた。

「何か。どんどん激しくなってきたいるしな」

「特にここはずっとだな」

彼等はそう話をしだした。

「あの禿のおっさんの街は」

「ああ」

ソ連の国父レーニンのことである。今彼等はレニングラード上空にいるのだ。この街を巡ってドイツ軍とソ連軍は激しい攻防を繰り広げてきているのである。

「陸軍も随分攻めあぐねているみたいだな」

「何でも守りがやけに堅いらしいぜ」

カールがヨゼフに言った。

「建物に立て籠もっていてな。女も子供もガリガリになって武器を持ってるな」

「おいおい、女も子供もかよ」

ヴォルフはそれを聞いて思わず声をあげた。

「男だけで戦えばいいだろうに」

「そうも言っていないんだろ」

カールは今度はヴォルフに答えた。

「何せ今イワンは崖っぷちだからな」

「さつさと落ちれば楽になるんだがな」

リヒャルトは半ば無意識のうちにこう突っ込みを入れた。

「あいつ等も俺達もな」

「向こうにも向こうの意地があるんだろ」

ヨゼフが言葉を返した。

「そこんところがどうしようもないから戦争になってるんだしな」

「それもそうか。しかし本当に敵がいないな」

「ああ」

「今日はもういないな」

仲間達はリヒャルトのその言葉に応えた。

「じゃあ帰るか」

「そうだな。燃料も少ないしな」

「しかし。ここの寒さは本当に酷いな」

リヒャルトはまた言葉を出してきた。今度の言葉は苦笑いを含ん

でいた。

「話には聞いていたが燃料まで凍るなんてな」

「まあロシアだからな」

「それも普通だろ」

「ドイツでもかなり寒いんだがな」

そのドイツから来ている彼等だ。しかしそれでもこの寒さには参っていた。ロシアの冬はそこまで桁外れのものであるのだ。

「それ以上なんてな」

「それでもちゃんと夏があるだろ」

「まあな」

彼等は六月に攻め込んだ。だから一応夏があることも知っているのだ。もっとも肝心な時にやって来た冬將軍のせいで今戦線は膠着してしまっているのだが。ヒトラーもドイツ軍の首脳も冬將軍のことはわかっていたがその予想を越えたものであったのだ。それがロシアの冬なのだ。

「まあ夏まで待とうぜ。最悪春までな」

「そうするか。夏にはイワンは降伏だ」

この時はまだこう思えた。

## 第二章

「この街からも解放されようぜ」

「ああ、是非な」

「そうさせてもらおうぜ」

空の騎士達はそんな話をしながら彼等の基地へ帰って行く。彼等の戦いは冬の間終わることはなく春も同じだった。そして夏も。彼等の戦いは続いていた。

その中で。リヒャルトは一人だけ基地の司令に呼び出された。戦いは激しくなる一方で撃墜されるパイロットも多かった。彼はその中で戦友達と何とか生き残っており今では基地のエースの一人になっていた。その彼に司令直々の呼び出しがかかったのだ。

「何だ？この前の出撃で三機撃墜したことのねぎらいならも受けたぜ」

「どうもそれではないみたいです」

彼を呼びに来た若い整備兵が応える。見ればまだその顔に幼さが残る。精悍そのものの熟練の戦士の顔になっているリヒャルトとはかなり違う顔になっている。

「詳しいことはわかりませんが」

「まあねぎらいじゃなかったら出撃の話だな」

それはしよっちゅうのことだった。だから彼はもうわかっていたのだ。

「どうせまたイワンの奴等が戦闘機を山みたいに送り込んできたんだろうな」

「いつも思いますがよくそこまで数がありますね」

「数で積み込むのは奴等の専売特許だ」

リヒャルトは右手を振ってシニカルに応えた。

「それしか芸がないとも言うがな。まあいい」

「司令のところに行かれるんですね」



「ドイツ軍の辞書に命令拒否はないからな」

その軍律の厳格さは伝統的なものがある。この戦いにおいてもドイツ軍の軍律は鉄のものであり続けた。如何にもドイツらしいといえはらしい。

「行くさ。それじゃあな」

「案内は私が」

「ああ、いい」

同行しようとするその兵士を制止した。

「もう道はわかってるんだ。そっちはそっちの仕事に戻れ」

「宜しいのですか、それで」

「司令には俺から言っておく」

こう兵士に言った。

「だからだ。わかったな」

「わかりました。それでは」

若い兵士は敬礼をしてリヒャルトの前から姿を消した。彼はそれを見届けると自分の部屋を出て司令室に向かった。粗末な煉瓦造りの廊下を歩くと硬い音が聞こえる。それを音楽にしながら司令室に向かうのであった。

司令室の前に着くと規律正しい動作で扉をノックする。それから扉を開けて部屋に入り敬礼をする。その敬礼はナチスドイツの敬礼であった。

「リヒャルト」カイザーリング大尉只今参上しました」

「うん、よく来てくれた」

司令はリヒャルトに返礼してから言葉を返してきた。ドイツ軍の軍服を厳格に着こなした初老の男である。白いものがある髪を丁寧に後ろに撫でつけ髭も奇麗に剃っている。ドイツ軍の軍人らしい風貌の男である。

「実はだ」

「出撃命令ですか」

「そうだ。この基地からは君だけだ」

「私だけですか」

リヒャルトはそれを聞いてまずはその目を動かした。

「何か特別な任務と見受けますが」

「夜間出撃だ」

そうリヒャルトに伝えてきた。

「今夜だ。いいか」

「夜間出撃ですか」

「そうだ。この基地で夜に戦えるパイロットは君しかない」

この時代は全天候で戦える機体もなくパイロットも限られていた。夜間戦闘機といったものもありアメリカ軍のP-61ブラックウィドーが有名である。

「それでだ。頼めるか」

「ですが司令」

リヒャルトは夜間出撃と聞いて司令に言葉を返すのであった。

「今この基地には夜間戦闘機はありませんが」

丁度全部撃墜されてしまっているのだ。元々一機か二機しかなくそれが全てやられたのだ。戦闘機と一緒に来たパイロットもその時に行方不明になってしまっている。

「どうされますか、それで」

「メッサーシュミットで出撃してくれ」

これが司令の言葉であった。

「今回は。それでいいか」

「メッサーですか」

「機体もそれしかない。そして出撃できるパイロットも君しかない」

「ないものばかりですね」

リヒャルトは司令の言葉を聞いて苦笑いせずにはいらなかった。

「元々ものがある軍じゃないですけれど最近はどうにも」

「まあそう言うな。これも戦争だ」

「そうですね。じゃあ行きます」

「済まないな」

「何、戦争なんで」

司令の言葉を繰り返す形になっていた。半分はわざとである。

「行かせてもらいますよ。じゃあそういうことで」

「出撃してレニングラードの西で他の基地の部隊と合流してくれ」

「西ですか」

「そうだ。そこから街の上で敵と戦う予定だ。赤軍の夜間戦闘機部隊とな」

「ああ、イワンの新しい戦闘機はそっちでしたか」  
そこまで聞いて話がわかった。

「連中は夜も昼もありませんからね、本当に」

「そういうことだ。ではいいな」

「ええ。夜での戦いもお手のものですよ」

彼はそう言つて屈託のない笑みを見せるのであった。

「ドイツ軍にとってはね。じゃあそういうことで」

「頼むぞ」

「了解」

こうして今夜の出撃が決定した。リヒャルトは真夜中の空港に出て愛機の側にいた。夏だからそれ程寒くはない。だが夜だというのは虫は少ない。彼はそれを見て言つたのだった。

### 第三章

「本当に生き物が少ないな、この国は」

「少なくとも虫は少ないですね」

整備担当の下士官が彼に応えてきた。リヒャルトは既にパイロットスーツを着ている。今空港にその格好でいるのは彼だけである。

「森に入ればでかい獣は結構いますけれど」

「クズリとかムースとかトナカイだな」

「ええ。あとは狼と」

「熊か」

ロシアの象徴ともなっている動物だ。寒い国である為そこにいる動物達はかなり大きなものになっているのだ。それがロシアの特徴でもある。

「そういうのはいるんですけどね」

「ついでに言えば人間もでかいしな、ここは」

「そうですね。それは」

「中には小さいのも混ざってるがな。東から来ているのがな」

ソ連は総動員をかけていた。その為多民族国家のこの国ではアジア系の兵士も多く存在していたのである。特に戦車兵はロシアの戦車の内部構造があまりにも小さい為小柄な兵士が多い。そのせいでアジア系の兵士が戦車兵になることも多かった。これはロシア独自のことである。

「大体は大きいな」

「別に大きくなくてもいいんですがね」

「まあそうですね」

下士官のその言葉に頷きながらまた周りに目をやる。周りはただひたすら暗く上には星達が瞬いている。蟹座がすぐに目についた。

「夏なんだな、一応は」

「ですね。星座を見ていると」

「星はロシアでもドイツでも同じか。他のものも同じだといいいんだがな」

「そうはいかないのが世の中のもので」

「全くだ。特に今はな」

「ええ」

直接言葉には出さないが戦争のことである。戦争をしているという事実は変わらない。だから今こうして夜間出撃に入ろうとしているのだ。他ならぬ彼が。

「そろそろいけるか？」

「はい、もうすぐです」

別の下士官がリヒャルトの今の問いに答えてきた。

「では大尉。御気をつけて」

「イワンを一人残らず叩き落してくるぜ。それでいいな」

「そうしてもらわないと困ります」

それは彼等の偽らざる本音であった。整備兵は送り出すことしかできない。しかし戦争に勝ちたいという気持ちは彼等も同じなのだ。戦場に向かうことはなくとも。

「ですから。御願いますね」

「ああわかったさ。じゃあ行くな」

「はい」

「出撃準備ができました」

ここで待っていた言葉がやって来た。

「大尉、御願います」

「わかったぜ。じゃあ行くな」

「御武運を祈ります」

「ヴォータンの加護ってやつだな」

そう言つて不敵に笑ってみせる。彼にも自信があるところが窺える笑みと言葉だった。

「ワルキューレに迎えられないようにはするぜ」

「ええ。では帰ったら」

「ワインで乾杯だ。ドイツのワインでな」

「楽しみにしていますので。では」

「またな」

互いに敬礼をし合って愛機に乗り込む。夜の世界を切り裂いて空に上がる。司令や整備兵達が出迎えて手を振るのは夜の闇の中ですぐに見えなくなる。しかし心は受け取った。リヒャルトはその心も胸に収め戦場に向かう。合流場所に辿り着くともうそこには多くの友軍機が集まっていた。二発の大型戦闘機メッサーシュミット一〇が主体だが彼が今のっているメッサーシュミット一〇九もある。フォッケウルフは見当たらない。

「他の部隊も苦勞しているんだな」

本来夜間にはあまり使わない一〇九も結構いるのを見てこう思った。

「このまま苦勞したまま、つてのは御免だがね」

「その一〇九」

そんなことを思っているところに通信が入って来た。

「所属基地と官職氏名は」

「第七空軍第二十四戦闘機大隊所属、ノブゴロド航空基地のリヒャルト」カイザーリング大尉だ」

彼は問われるままに名乗った。

「これでいいか」

「そうか。カイザーリング大尉か」

通信先の相手はリヒャルトの姓を確認した。

「わかった。では合流してくれ」

「了解」

「作戦は聞いているな」

闇夜の中でまたリヒャルトに問うてきた。

「我々はこれから」

「闇夜の中に迫り来るイワン共を成敗するんだな」

「そついうことだ。わかっているなら話が早い」

「そう聞いて来たんでね」

リヒャルトは笑いながら相手に言葉を返した。それはもう既に司令から聞いていることである。心の中では何を今更という気持ちもあつた。

「夜も戦えるってことでね」

「そうか。それは有り難い」

相手はリヒャルトが夜間戦闘ができると聞いて安心したような言葉を述べてきた。

「そうでないとな。やはり」

「おいおい、そういう人間ばかり集められたんじゃないのか？」

リヒャルトは彼が心から安心したような声を出すのでこつ言葉を送ってからかった。

「頼むぜ。素人なんていねえよな」

「一応玄人ばかり集まっていることになっている」

「一応ねえ」

「少なくとも向こうよりは質はずっといい筈だ」

東部戦線の特徴の一つにもなっていることである。質では圧倒的に上のドイツ軍をソ連軍は数で向かう。結果としてドイツ軍は自分達の何倍もの相手を常に向こうに回していたのだ。

「その分数は向こうが圧倒的だがね」

「撃墜数が稼げていいぞ」

今度はあえてリヒャルトをリラックスさせる為の言葉であつた。

「向こうから寄って来るのだからな」

「美女なら余計にいいんだがね」

「それは勝ってからだな。とにかく今は」

「わかつてるさ。イワンの奴等を一人でも多く空から叩き落すんだな」

「そういうことだ。では合流してくれ」

「ああ、わかつたぜ」

相手のその言葉に頷く。そうして合流した後でレニングラード上

空へ向かう。だが市街地上空に入ろうとしたその時だった。  
「前だな」

編隊の中の一人が言った。



## 第四章

「来てるぞ」

「！？確かに」

続いて別の一人も気付いた。この時代のドイツ軍はまだレーダーは十分に配備されているとは言えない状況であった。だから多分に目に頼っていた。

「いるな。向こうは気付いているか」

「動きを見る限りはまだだ」

見ればソ連軍の夜間戦闘機部隊はのんびりと前を飛んでいるだけだ。確かに数はこちらより圧倒的に多い。しかし気付いていないのならばやり方があった。

「仕掛けるな」

「勿論だ。いいか皆」

指揮官機から指示が来た。

「上にあがる。そこから一気に急降下を仕掛けるぞ」

「それでまずは一撃か」

「そうだ。次に急上昇を仕掛けてもう一撃」

航空戦術の基本の一つである。とりわけ一撃離脱を得意とするメッサーシュミット一〇九や一一〇にはかなり有効な戦術である。

「それで行くぞ。いいな」

「了解」

「じゃあそういうことで」

「全機続け」

早速動く。指揮官機に続いて上昇する。当然ながらその中にはリヒャルトもいる。

「さて。何機叩き落せるかだな」

リヒャルトは機体を上昇させながら心の中で呟いた。自分が撃墜される可能性も考えているが今は前者の方がかなり勝っていた。

その気概を胸に上昇から下降に移る。まだ敵は気付いていなかった。

「よし、これなら！」

目の前の一機に照準を合わせる。その敵機に対して射撃ボタンを押す。闇夜の中に赤い光が放たれそれがその敵機を撃ち据えた。

敵機は忽ちのうちに強い衝撃を受け一瞬動きを止めた。その動きを止めたのは一瞬のことですぐに碎け散り夜空の中で四散して地面に落ちていく。まずはそれで一機だ。

敵の最期まで見ることなく突き抜ける。そこから予定通り急上昇を仕掛ける。

「敵も気付いた、今のでな」

指揮官機から通信が届いた。

「もう一撃の後はドッグファイトになる。覚悟はいいな」

「勿論だ」

「最初からそのつもりさ」

歴戦のルフトパツフェの者達はそれで怯んだりしなかった。今までの数多くの戦いが彼等を支えていた。ポーランドでも北欧でもフランスでもギリシアでもイギリスでも。戦ってきた経験がものを言っていた。それを糧に今赤い敵軍に向かっていったのだ。

「そうか。じゃあ後は頼むぞ」

「了解。お互い生き残ろうぜ」

「そういうことだな」

互いに言葉を交えさせて急上昇からまた一撃を浴びせる。リヒャルトもその中でまた一機撃墜する。今度の敵も四散して赤い炎となつて大空を墓標としたのだった。

「さて」

彼は後ろ目にその墓標を見ながら呟く。

「問題はこれからだな。一体何機やれるかやられるか」

これで敵は完全に警戒態勢に入っていた。流石に二度も攻撃を受けて敵の位置に気付かない者もない。急上昇から反転しまた降下

に移る彼等に対して上昇して向かって来ていた。上と下から二つの軍がぶつかり合う形になろうとしていた。

「正面から来てもな」

リヒャルトはその敵軍に対して言う。しかしこれは独り言になっていた。

「そうそうやらせはしないだよ。ドイツ軍はな！」

ドイツ軍としての誇りと共に突き進む。正面からぶつかり合った両軍は最初の激突でお互い何機か失った。そこからドッグファイトに入るともうそれぞれが生き残るだけだった。

それはリヒャルトも同じだった。激しく旋回し上下しながら相手を探し倒していく。ここでも二機倒したが周りにはまだ敵が多い。そのうえ自軍の撃墜も目立っていた。

「何人生き残っているかな」

減っているメッサーシュミットの数を見ながら呟く。

「こつちも。生き残らないといけないがな」

そう呟きながら前の敵に照準を合わせる。また射撃を放とうとしたその時だった。

「!？」

不意に後ろから衝撃を受けた。機体が大きく揺らぐ。

「しまった、後ろからか！」

「おい、大丈夫か!？」

仲間の心配する声と共に後ろから一機の敵機が通り過ぎていく。その敵が撃ってきたのは間違いなかった。敵のパイロットの顔も姿も夜闇の中で見えなかったがその動きは誇らしげなものに見えた。

「ああ、何とかな」

彼は仲間にごう言葉を返した。少なくともダメージは受けていないのは確認できた。

「ただ」

「どうした？」

「これ以上の戦闘、いや飛行も無理そうだ」

「やられたか」

「ああ。それも派手にな」  
通信で答えた。

「操縦が効かなくなっている。動かない」

「そうか。だったらすぐに脱出しろ」

それしかなかった。動かない機体に乗っていても死ぬだけである。  
「いいな」

「わかった。じゃあ後は頼む」

彼も仲間の言葉に従うことにした。そのまま下降し敵から離れたところでコクピットから出た。この時もかなり緊張していた。

「開けよ」

これはパラシュートに願った言葉だ。パラシュートが開かずにそのまま地面に激突して死ぬパイロットも多いのだ。この時開かず白く長い姿を見せるパラシュートを狼煙と呼んでいる。欧州戦線の名物でありリヒャルト自身その狼煙を何度も見てきている。他人事ではないのだ。

願いつつコクピットから完全に出て下に落ちる。その中でパラシュートを開く。

幸いにしてパラシュートは開いた。上を見ればまだ戦闘が続いている。多くの炎が起こりそれが戦闘が続いて人が死んでいることを知らせていた。

「勝てばいいがな」

彼は多くの炎を見ながら思った。撃墜されても自軍の勝利を願っていたのだ。

「だが。どうなるかな」

そこまではわからず視線を下にやる。下は真っ暗闇で何も見えな  
い。とりあえず敵に近い場所や沼地でないことを願いつつ降りるの  
だった。

背中から着地すると鈍い衝撃が襲う。それに堪えて降りるととり  
あえずは無事だった。そのうえでパラシュートを外して周りを見る

とそこには何も無い。最初はそう見えた。

「とりあえずは助かったが」

それでもまだ安心はできない。機体から離れたパイロットは丸腰だ。武器なくして戦場に放り出された形になるのだ。早いうちに安全な場所に逃れるなり友軍に助け出されないといけない。彼は立ち上がるとまずは周りを見回した。見れば周りには長い水草が見える。他には何も見えない。

「沼地かな。ついてないな」

まずはそれを思い舌打ちする。次にコンパスを取り出す。落下の衝撃でも幸いにして壊れていないコンパスを見つつ南に向かうつもりだった。南に自分の基地があるからだ。

「こっちか。よし」

方角を確認してから向かうことにした。歩きだしたところで顔の前を何かが横切った。

「!？」

それは淡い緑の光を放っていた。彼にはそれが何かすぐにわかった。

「蛍か」

それしかなかった。今までロシアでは見たこともなかったものだ。その蛍が彼の前を横切ったのである。

蛍の光は左から右に向かう。それを目で追うと周りには多くの蛍が飛んでいた。ふわふわと飛びながら辺りを輝かせている。見れば蛍達は時々互いに打ち合ったりしている。彼はその姿を見てあるものを思い出したのであった。

「同じなのか」

自分が今までいた戦場と同じだと。そう思ったのだ。蛍達が今まで戦っていた自分達の姿と重なる。戦場で散る自分達の姿と。

「俺達と。いや」

ここでまた思っのだった。

「俺達は。蛍だ」

それが今彼が思ったことだった。自分の周りに淡い光と共に舞う  
蛍達を見ながら。

「死ねばこうして舞うのかもな。魂が」

蛍の光が魂に見える。その気持ちを抑えられなくなったのだ。

一旦思えばそれが支配していく。彼は立ち尽くして蛍達を見る。  
その気持ちを抑えられなくなったまま見ているのだった。

「空で戦い」

上を見る。まだ戦いは続いている。炎はもう星に見える。無数の  
星の瞬きが出ては消えている。それを見ながら思うのだった。

「空で散る。そしてその魂は」

蛍になるというのだ。そう思えるのだった。

「そして。蛍になっても」

戦っている。そのことに何かやりきれないものを感じる。しかし  
それでも。

「ならいいさ。それでも」

彼は言った。首を横に振った後で。

「戦ってやる。蛍になっても何になっても」

決意を固める。それは軍人だからこそその決意だった。その覚悟は  
もうあったのだ。

その決意を固めたうえで歩きだした。周りにはまだ蛍達が舞って  
いる。自分達が。これから何があるかと蛍になろうと戦う、軍人で  
ある限り。その決意を胸にまた戦場に戻るのだった。戦士として。

戦場の蛍 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0444e/>

---

戦場の蜚

2010年10月8日13時32分発行